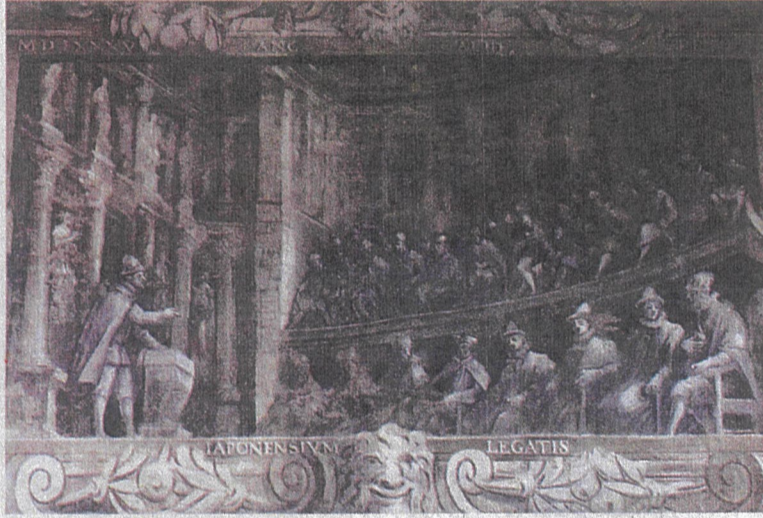


テアトロ・オリンピコの伊東マンショらが描かれた壁画 (イタリア)



大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

伊東マンショ

イタリアのベネチア西方のピチエンツァという街に、世界最古の屋内劇場があります。「テアトロ・オリンピコ」と呼ばれるネサンス期の建築家アンドレア・パツラーディオが設計して1585年に落成したもので、劇場の一室に入ると、「IAPONENSIVM LEGATIS」(日本人使節)と銘打った壁画を見ることが出来ます。前方の椅子に座る人々のうち、右側の4人が日本人で、リーダーは伊東マンショです。

伊東マンショこと伊東祐益は、戦国末期から江戸初期のキリシタンで、天正遣欧少年使節の主席正使としてローマへ派遣された人物です。日向国の戦国大名伊東義祐の娘を母、同氏庶流の祐青(「すけきよ」とも)を父として、永祿12(1569)年ごろに日向国都於郡城(宮崎県西都市)に生まれたとされます。

当時の伊東氏は薩摩の島津氏の侵攻に窮し、天正5(77)年ついに当主義祐が一族を連れて豊後に逃れ、大友義鎮(宗麟)を頼ります。その一族の中に、幼少のマンショの姿もありました。豊後はカトリック教団の活動全盛期で、同6(78)年には大友義鎮も受洗します。幼いマンショもそうした影響を受け、キリスト教の司祭を志して有馬(長崎県南島原市)のセミナリオでキリスト教、ラテン語、音楽などを学びました。そのころ、イエズス会の東インド管区巡察師(アジアでの布教状況を査察するために派遣された宣教師)として日本を訪れていたアレックスサンドロ・ウァリニャーノは、日本のキリシタン大名の名代をローマに派遣することを企画します。その使節に起用されたのが、セミナリオで学んでいたマンショら10代前半の少年4人でした。

少年使節としてローマへ派遣

11月1回掲載

部長・教授